

<書評と紹介> ヨーゼフ・クライナー、小口雅史、吉成直樹編 『古代末期・日本の境界：城久遺跡群と石江遺跡群』

永山, 修一 / NAGAYAMA, Shuichi

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

74

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

47

(発行年 / Year)

2010-09-30

〈書評と紹介〉

ヨーゼフ・クライナー、小口雅史、吉成直樹編

『古代末期・日本の境界―城久遺跡群と石江遺跡群』

永山 修一

最初に個人的な話で申し訳ないのだが、二〇〇三年に喜界島で防衛施設局喜界通信所（いわゆる象のオリ）建設に関連して山田中西遺跡の調査が開始され、翌年夏私は、琉球大学の池田榮史氏、奄美市立（当時は名瀬市立）奄美博物館の高梨修氏とともに、喜界町教育委員会の澄田直敏氏が担当されていた山田半田遺跡の調査現場を訪れた。喜界島の高台に膨大な数のピットを見て、これはいったいどのような遺跡になるのだろうかと思っただ。このあと県営の土地改良事業に関わって、半田口・小ハネ・前畑・大ウフ・半田・赤連と二〇〇九年度まで調査が続き、幾度となくこの城久遺跡群を訪ね、調査状況等をご教示いただいた。この間、二〇〇五年三月に喜界島郷土研究会が主催（後援、九州国立博物館設立準備室）して「喜界島シンポジウム 古代・中世のキカイガシマ」が開催され、二〇〇七年には國學院大學の鈴木靖民氏と池田榮史氏によって『東アジアの古代文化』一三〇号（大和書房）に「古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島」の特集が生まれ、同年

書評と紹介

二月には奄美市と喜界町でシンポジウム「古代・中世の境界領域―キカイガシマの位置づけをめぐって―」が開かれた。さらに翌年には、このシンポジウムの内容をもとに池田榮史編『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』（高志書院）が刊行された。一連の古代・中世のキカイガシマをテーマとするシンポジウムに参加し、関係書籍に接する中で、強く興味を引かれたのが、東北新幹線新青森駅およびその周辺開発に関わって調査され、鈴木靖民氏によって紹介された青森市の新田（一）遺跡のことであった（『古代喜界島の社会と歴史的展開』『東アジアの古代文化』一三〇号、「広がる古代日本の境界」「朝日新聞」二〇〇七年三月二三日付夕刊）。いずれも、古代末期の日本の境界域に立地し、双方の対比の中で当該時期の日本の姿に新しい一面を見いだせるのではないかと考えたからである。残念ながら、新田（一）遺跡の現場を訪れる機会はなかったが、二〇〇九年秋に鹿児島歴史資料センター黎明館で開催された企画特別展「古代のロマン北南」では、喜界島城久遺跡群出土の遺物とともに新田（一）遺跡の出土遺物や中尊寺関係のヤコウガイ螺鈿による工芸品などが展示された。そうした折、法政大学国際日本学研究所が「古代末期の境界世界―石江遺跡群と城久遺跡群を中心として―」というシンポジウム（『異文化研究としての「日本学」のサブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」の総括シンポジウム」を開催することを知り、二〇〇九年一月一三・一四日の二日間にあたる報告・討論をフロアから聞かせていただいた。たいへん充実したシンポジウムであったが、それから半年にしてそのシンポジウムをもとにした本

書が刊行され、この二つの遺跡群に関する、最新の情報と現時点での評価を共有することが可能になった。短期間での刊行を実現された関係諸氏のご努力に対してまずは敬意を表したいと思う。

最初に、本書の構成を掲げ、その内容を紹介していきたい。
はじめに
ヨ―ゼフ・クライナー、吉成直樹

① 古代末期の北と南

I 南の世界 喜界島・城久遺跡群

② 古代・中世の南方世界―キカイガシマ・交易・国家―

③ 喜界島城久遺跡群の発掘調査

④ 薩南諸島の様相からみた喜界島

⑤ 列島南縁における境界領域の様相

― 古代・中世の奄美諸島をめぐる考古学的成果 ― 高梨修

⑥ 城久遺跡群の日本古代中世における社会的地位

― 津軽石江遺跡群との相違を含めて 中島恒次郎

⑦ ヤコウガイ交易二つの口と一つの口―争点の整理と検討―

安里進

⑧ 琉球方言ハ行子音 p 音の素性をさぐる

⑨ 補論 I 日本の中の諸言語

― アイヌ・ヤマト・琉球の言語生成 ― 間宮厚司

⑩ 補論 2 『おもろさうし』の甕

福寛美

II 北の世界―青森市・石江遺跡群

⑪ 古代末期の北方世界―北方史グル―プの研究視覚―

小口雅史

⑫ 青森市石江遺跡群の特質

⑬ コメント 1 青森市新田 (2) 遺跡 (県教委担当)

⑭ コメント 2 新田 (1) 遺跡出土木簡の意義

⑮ コメント 3 新田 (1) 遺跡出土の仏教関係遺物について

⑯ コメント 4 秋田県の古代木製祭祀具

⑰ 九・一〇世紀の青森県周辺の地域性

⑱ 古代末期の蝦夷社会

⑲ 渤海から見た北東北のシャーマニズムと仏教

III 討論―南北の境界の検討

⑳ 南北の境界領域の比較―討論のまとめ―

おわりに

小口雅史

二

最初の論文の①村井章介「古代末期の北と南」は、シンポジウムの基調講演をもとにした論考である。村井氏が、一九八五年に発表した「中世日本列島の地域空間と国家」で示した、同心円モデルと双曲線モデルの重なりとして列島とその周辺の空間のあり方に若干の修正を加えたものである。

同心円モデルとは、究極的には天皇の身体を中心に、中心―周縁―境界―異域という四つの空間に分節化され、浄―穢構造に重なるものであり、外浜と鬼界島はそれぞれ東と西の境界となる。

双曲線モデルとは、東では日本海、西では東シナ海という内海をとりまく地域を念頭に置いたもので、外部にある別の中心との媒介項を形づくるものである。城久遺跡群と石江遺跡群は、それぞれ境界領域に浮かぶ島のように「移植された中心」と呼ぶべき遺跡であり、同心円モデルに修正を迫るものとなったことを説く。

三

「Ⅰ 南の世界 喜界島・城久遺跡群」として②～⑩の九本の論者が排列されている。城久遺跡群は、喜界島中央部の標高九〇～一六〇¹⁾の海岸段丘上に位置し、半田・前畑・大ウフ・赤連・小ハネ・半田口・山田半田・山田中西の八つの遺跡からなる面積約一三万平方²⁾、九世紀～一五世紀の遺跡である。

②吉成直樹「古代・中世の南方世界―キカイガシマ・交易・国家―」は、「Ⅰ ヤコウガイ大量出土遺跡群」、「Ⅱ 城久遺跡群とカムイヤキ古窯跡群」、「Ⅲ 城久遺跡群とグスク時代の開始」という三項目を立てて、古代～中世併行期の琉球弧の歴史像を、現時点における考古学・文献史学の両面の研究成果に基づいて整理した。さらに、「Ⅳ 課題と展望」では、喜界島城久遺跡群そのものの性格と評価の問題、グスク時代の開始や琉球王国形成に喜界島（奄美諸島）が果たした役割の究明が必要なることを示し、「五本書収録論文の紹介」では、研究史を踏まえながら、③～⑩の内容を簡単に紹介している。

③澄田直敏「喜界島城久遺跡群の発掘調査」は、発掘担当者による城久遺跡群の概要説明である。出土遺物から、Ⅰ期（九世紀

～一世紀前半）、Ⅱ期（一世紀後半～二世紀）、Ⅲ期（二世紀～一五世紀）に分け、建物跡・土壙墓・鍛冶炉跡などの遺構について述べている。Ⅰ期では、越州窯青磁が約一〇〇点出土しており、『日本紀略』にみえる大宰府が下知した「貴駕島」との関連が想定され、Ⅱ期は、中国産貿易陶磁器や滑石製石鍋、朝鮮系無釉陶器や初期高麗青磁などの出土から、宋・高麗を含む環東シナ海を舞台として活発な交易活動の中で城久遺跡群が大きな役割を果たしていたことを述べる。この遺跡群に関して昨年までに二遺跡、三冊の報告書が刊行されているが、現時点で最もまとまった遺跡群の概説となっている。

④新里貴之「薩南諸島の様相からみた喜界島」は、土器の中でも煮沸具を中心に、喜界島とその周辺のトカラ・奄美諸島の様相を検討している。その中で、喜界島がコロニーのように点的に異文化の中に入り込む特殊な環境ではなく、南に張り出した土師器分布圏の最南端の位置づけが与えられること、すなわち喜界島の生活様式は南島の要素が認められ、喜界島在来の集団が外来の文化に濃厚に接触した結果生じた受容形態の一類型であることを指摘している。

⑤高梨修「列島南縁における境界領域の様相―古代・中世の奄美諸島をめぐる考古学的成果―」は、貝匙あるいは螺鈿材料としてのヤコウガイを威信財ととらえ、奄美諸島に集中するヤコウガイ大量出土遺跡は、ヤコウガイ交易に関わるものであるとする。

ついで、一世紀代から一四世紀前半まで生産が継続した徳之島のカムイヤキ古窯跡群を、「千竈時家処分状」や「金沢文庫蔵日本

図」の研究成果から国家領域周縁地域に位置する交易活動拠点としての奄美諸島と関わるものとする。また、古代―中世の史料に登場するキカイガシマに関する文献史学の研究成果から、大宰府の出入機関や政治勢力が常駐する状況など、城久遺跡群の出土遺物の非在地性について、土師器甕・滑石製石鍋・高級船舶容器類の大量出土を紹介した。さらに、安里進氏による高梨氏に対する疑問・批判に対して反論を行い、最後にヤコウガイ大量出土遺跡・カミイヤキ古窯跡群・城久遺跡群の存在によって、「境界領域」として機能していた奄美諸島の新たな歴史像が確認されてきたことを指摘している。

⑥中島恒次郎「城久遺跡群の日本古代中世における社会的位置―津軽石江遺跡群との相違を含めて―」は、「中心」と境界領域の位相を分析する装置として、「中心」で使用される焼き物がどのようにに模倣されていくかという「原型―模倣型」を用いて、煮沸具や階層表現装置と考えられる供膳具の分析を行っている。「中心―境界領域（異域―中心）の融合地）―異域を設定すると、供膳具も煮沸具ともに模倣している津軽の石江遺跡群は境界領域に属し、煮沸具のみ模倣し模倣の供膳具が存在しない喜界島城久遺跡群は異域の中に移植された「中心」といえることを指摘した。

⑦安里進「ヤコウガイ交易二つの口と一つの口―争点の整理と検討―」は、ヤコウガイ交易のルートに関して、〈奄美北部―大和〉のみが存在するという高梨氏による批判に対して、〈奄美北部―大和〉というルートを認めた上で、久米島に集中出土する開元通宝を中国との直接交易の産物ととらえ、琉球列島側の対価がヤコウ

ガイだったとする木下尚子氏らの説や安里氏自身が久米島の大原で確認したヤコウガイ加工場遺跡を論拠として〈久米島―隋・唐〉というもう一つのルートの存在を主張したものである。

⑧中本謙「琉球方言ハ行子音 p 音の素性をさぐる」は、これまでに古代音の残存としての見方がなされていた琉球方言のハ行子音 p 音について、古代日本語のワ行子音に対応する b 音と関係づけられて宮古・八重山方言を中心に検討を行い、狭母音化に伴って呼気が強くなりワ行子音が b 音に変化すると考えられることから、同じ原理によって p 音に変化する可能性のあることを述べ、ハ行子音 p 音が比較的新しいものである可能性を示した。

⑨間宮厚司による「補論 1 日本の諸言語―アイヌ・ヤマト・琉球の言語生成―」は、二〇〇八年九月に行われた研究会「日本の中の諸言語」の報告をもとにして、日本語・アイヌ語・琉球語の関係について概説したものである。アイヌ語は、日本語とは全く異なる言語で、縄文時代に日本列島で話されていた言語がその祖先にあたり、弥生文化とともに日本語が日本列島全域に広まるにつれて、アイヌ語は南から北へと移動させられたとし、琉球語は日本語の一方言であり、日本語の琉球への流入の時期については、民族学の DNA 資料等、異分野の研究成果を持ち寄って総合的に究明していく必要があることを述べる。

⑩寛寛美「補論 2 『おもろさうし』の甕」は、『おもろさうし』に登場する二五例の器物Ⅱ甕の例を分析している。祭祀の場に据えられた多くの甕の中身が概ね酒や神酒であったことを述べ、酒甕・神甕は、カミイヤキ、タイ製・ヴェトナム製・中国製の可

能性があるが、多くの敷を揃え、庭や柱など屋外での祭祀の場で汚れを気にせず惜しげもなく地面に置く礎としては、南西諸島の権力者にとって最も身近なカムイヤキであった可能性が強いことを指摘する。

四

次いで「Ⅱ 北の世界―青森市・石江遺跡群」として⑪～⑲までの九本の論考が排列されている。石江遺跡群は、新田(1)～(2)遺跡、高間(1)～(6)遺跡、新城平岡(2)～(4)～(5)遺跡を総称したものであり、発掘調査は、青森市教委と青森県教委が分担して担当している。なお、⑬～⑯の四本のコメントは、二〇〇八年九月に青森市で行われた研究会の報告をもとにしている。

⑪小口雅史「古代末期の北方世界―北方史グループの研究視覚―」は、石江遺跡群の正式報告書刊行が始まった現時点で、平安京と同様の祭祀が行われ、北方交易の富が集中し、また陸奥国府の先施設という想定すら出されている新田(1)遺跡(石江遺跡群)を先人観無しに、冷静に見直す必要を説き、「一 北日本における交易と交流をめぐる」二 北方交易の展開と「防御性集落」の出現「三 新田(1)遺跡の出現」の項目をたて、古代末～中世初期の北日本の史的展開を概観している。そして、⑫～⑲に関して簡単な紹介を行っている。

⑫木村淳一「青森市石江遺跡群の特質」は、青森市教委の発掘担当者として発掘調査・整理作業進行中の石江遺跡群の現時点で判明している概要を述べる。新田(1)～(2)遺跡、新城平岡(2)

(4)遺跡、高間(1)遺跡の概要を述べ、九世紀後半～一三世紀を、a九世紀後半～一〇世紀前半、b一〇世紀中葉～一世紀前半、c一二世紀後半～一三世紀前半の三期に分けて、時期変遷の概観を示す。そして、石江遺跡群は、津軽地方で集落が増加する動向の中で九世紀後半以降に成立し、一〇世紀中頃～一世紀中頃に開郭集落(いわゆる防御性集落)となること、すなわち前代からの変遷を経た在地の一勢力の拠点となる集落であること、北方的要素としては擦文土器、南(国家)側要素としては緑釉陶器・八稜鏡・石帯・楡扇・木簡・神像・(仏)像手・木製祭祀具・(鉄製)鏡・墨書土器・土馬などが出土するが、直接的流入は鏡や緑釉のごく一部で、残りは擦文土器と同様に在地の生産であること、しかし木製祭祀具・仏教的要素については、非直接的だとしても情報を入手し、在地で製作し、祭祀・宗教的行為を行っていることを指摘した。

⑬葛城和穂「コメント1 青森市新田(2)遺跡(県教委担当分)は、青森県教委の調査担当者として、新田(2)遺跡の概要、および縄文時代・平安時代・中世の遺構について述べる。

⑭渡辺晃宏「コメント2 新田(1)遺跡出土木簡の意義」は、新田(1)遺跡から出土した一一点の木簡(青森市教委担当分一〇点、青森県教委担当分一点)を、a荷札状の木簡、b異形の荷札状の木簡、c異形の形代状の木簡、d物忌札、e習書、f断簡に分け、律令制下の木簡と比較し、新田(1)遺跡出土木簡にどの程度律令制の影響を捉え得るかの検討を行ったものである。墨書内容から見ると、律令制支配に関わる内容は全く見られず、形

態的にも類似したものはあるが、律令制支配に関わる木簡には通常見られない得意な形状もあり、新田(一)遺跡出土木簡をストリートに律令制的要素に結びつけて理解するのは適当ではないとする。

⑮須藤弘敏「コメント3 新田(一)遺跡出土の仏教関係遺物について」は、新田(一)遺跡で出土した鉄鏡(鏡・仏手・金剛杵状木製品・未開敷蓮華状木製品・水瓶型木製品・火炎光背断片・神像(二点・塔身の計九点)に及ぶ仏教関係遺物について検討し、鉄鏡(鏡)以外は、中央の本格的造形とは形状も技術も異なり、材質も含めて地元青森で作成された可能性を指摘する。

⑯山田祐子「コメント4 秋田県の古代木製祭祀具―能代市樋口遺跡を中心として―」は、秋田県能代市の樋口遺跡および北秋田市の地藏岱遺跡で出土した斎串・人形・鎌形・刀形などの木製祭祀具を検討し、秋田県内では城柵を中心に律令祭祀が導入され、律令体制が衰退した後にも、地域によって内容を取捨選択しながらも同様の祭祀が行われていたことを示し、新田(一)(2)遺跡の木製祭祀具は律令祭祀の系譜に連なるものの、樋口・地藏岱遺跡とは別の取捨選択を経ており、伝播の過程の究明には今後の青森県内の事例の蓄積が必要とする。

⑰宇部則保「九・一〇世紀の青森県周辺の地域性」は、青森県を太平洋側の南部(八戸)と北部(上北・日本海側の南部(津軽南部))と北部(津軽北部)の四地域に分け、九世紀以前から継続する集落が見られる伝統集落域は、南部の二地域、九世紀後半―一〇世紀の集落がほとんどを占める新興集落域は北部の二地域であ

り、南から北へ集落域が拡大していく状況を示した。また、九世紀初頭前後の土器様相について、ロクロ土師器や須恵器について検討し、九世紀後半―一〇世紀の様相を示し、津軽北部では、九世紀後半以降急激ともいえる社会変化が起こっており、これは在地集団の統合が希薄な中で、律令側からの人・物・技術が入っていったことによるものであることを示した。

⑱八木光則「古代末期の蝦夷社会」は、北奥古代末期社会の特徴を表すキーワードとして①囲郭集落、②北奥祭儀、③北方交易をあげ、検討を加えている。囲郭集落が成立する背景として、城柵が終焉したことで朝貢饗給関係により保たれていた秩序が解体し、北方交易の隆盛が無法・無秩序な状況を生み出したことを示す。また、北奥祭儀には複数の系譜があり、仏教の浸透度が低く、古密教の法具、斎串や形代を用いた祭儀が行われたが、いずれも型式変化、独自化する特徴を指摘する。さらに、北方交易を、第一段階(七―九世紀前葉)、第二段階(九世紀中葉―一〇世紀前葉)、第三段階(一〇世紀中葉―一世紀前葉)、第四段階(一―一世紀代)の四段階に分け、第三段階では城柵での朝貢は終焉するものの、受領官が関わって以前にも増して多くの産品が流通していたことを示し、古代末期の北奥社会の位置づけを示した。

⑲小嶋芳孝「渤海から見た北東北のシャーマニズムと仏教」は、緩分河流域の仏教遺跡を紹介し、これらが渤海の王権によって、境界領域を超えて侵入してくる災いを防御する目的で造営されたものとする。また、蝦夷の基層文化は大陸からの影響を受けたシャーマニズムであり、北東北を中心に出土する錫杖杖鉄製品等

は、シャーマニズムと密教系仏教が融合した蝦夷社会の固有宗教で発音具と使用された祭具であるとし、石江遺跡群では、これとともに木製祭具を用いた「払い」を意識した祭祀も行われたが、その背景には日本の王権の論理ではなく、境界領域に住む蝦夷の論理があったとしている。

五

第3部では、シンボジウム一日目の城久遺跡群に関する質疑応答、二日目の石江遺跡群に関する質疑応答、そして最後に行われた総括討論をあつかっている。その際、南に関する内容を吉成直樹氏、北に関する内容を小口雅史氏が要約・整理し、テーマごとにまとめられているので、たいへん理解しやすくなっており、①論文と第3部だけでも、現段階での研究状況や課題等の概要を知ることができる。

以下第3部で整理されたテーマのいくつかに関して、感想めいたことを記しておく。「なぜ喜界島か？」は、奄美諸島の中でなぜ喜界島が選択されたかということであるが、喜界島における在地的の希薄さは、喜界島の在地の勢力の少なさ、すなわちヤマトの勢力を扶植しやすかったという点に求めることも可能ではないか。この点に関して、昨年手久津久集落で、兼久式土器を主体としヤコウガイ等が出土する川尻遺跡の確認調査が行われたことより、今後の本格的調査によって城久遺跡群と喜界島の在地社会との関係など新たな評価に期待がかかることである。

「外浜の範囲について」は、史料に現れる外浜の変遷と、考古学

的な変化が対応するのか否かについて今後の議論に興味の引かれることである。

「城久遺跡群に住んだ人びとと周辺との関わり」については、城久遺跡群に住んだ人びとが何を食料としていたのか、兼久式土器を使う人びとと同じか異なるか大きな課題であるが、城久遺跡群は六世紀以上にわたる遺跡であるから、中島恒次郎氏の言う「落下傘部隊」の降下がどれくらい期間にわたって行われたのか、この間の変遷をどう考えるかが重要となってくる。

「城久遺跡群は官衙か？」に関しては、九世紀末の大宰府の下知を受ける存在（『日本紀略』長徳四年（九九八）九月十四日条）が、一二世紀初頭には喜界島人の紀伊国漂着に際して宋人定に準じる陣定が行われる（『長秋記』天永二年（一一一一）九月四日条）ように異国として位置付けられるようになっており、一一世紀代にキカイガシマの位置付けが大きく変わっている。従って、一一世紀以前の段階での官衙の存在するかどうか問題であるが、高梨氏が述べているように、南島の厳しい気象条件の中で、いわゆる官衙風の建物が建てられたかどうかは明らかでない。

「石江遺跡群は官衙か？」については、例えば胡桃館遺跡のような遺構のほとんど残らず、考古学的に認識できない建物も視野に入れば、前テーマと同じく、境界領域においては従来の官衙のイメージを再検討してみる必要もあると思う。

「ヤコウガイ交易の「二つの口」」については、奄美諸島とヤマトの交易に関しては高梨・安里両氏が認めているところであり、問題は久米島のヤコウガイ大量出土遺跡をどう評価するかにある。

安里氏の言う大原ヤコウガイ加工場遺跡は、正式な調査が行われておらず不明の点が多いが、清水貝塚・北原貝塚については問題がない。その上で、『続日本紀』和銅七年(七一四)十二月戊午条の「少初位下太朝臣遠建治等、南島の奄美・信覚及び球美等島人五十二人を率ゐ、南島より至る。」の球美を久米島とすれば、久米島もヤマトのとの交易を行っていたと考えられる。また、久米島と中国との交易論の前提には、南西諸島で出土している開元通宝に関する木下尚子氏の見解があるが、南島で最も多い三三枚の開元通宝が出土した石垣島崎枝赤崎貝塚とヤコウガイ交易の関係は明確ではなく、開元通宝の存在から唐との交易の存在は言えるものの、一歩進んでその対価をヤコウガイに特定することには躊躇を覚える。

「北(渤海)との交易」¹¹⁾「南の交易」については、南北にもたらされた物を中心に討論されているが、南北から入手された品々が「中心」においていかなる意味を持つ品々であったかを、時間軸を織り込みながら見ていく必要があると考える。一例をとれば、中里壽克氏によって一二世紀と一三世紀の交ころから螺鈿材料がヤコウガイからアワビに変化することが説かれているが(古代螺鈿の研究)上・下『國華』一一九九号(一九九五年)・一二〇三号(一九九六年)、これがヤコウガイの交易品としての価値にどのような変化をもたらしたのか、今後の大きな課題となると思う。

「五所川原産須恵器とカムイヤキ」については、五所川原須恵器窯は九世紀一〇世紀に操業しており、全国的に見れば古代須恵器生産の掉尾に位置するが、カムイヤキ窯は一一世紀に操業を開

始し、中世陶器として理解されるものであつて、生産の背景に大きな違いが存在している。また、「境界の交易にたざざわった商人たち」についても、南北の交易システムが、一一世紀頃を堺にして大きく変容することを意識しておく必要があると考える。

「南と北の比較」については、本書の結論として、非在地的性格の南の城久遺跡群に対して、北の石江遺跡群は在地性を強く持っていると考えた。しかし、村井章介氏も述べているように、石江遺跡群を在地に還元してしまうことは正しくない。強い在地性をもちながらも、なぜ交易の拠点たり得たかこそ追求されるべき課題であると考ええる。

六

城久遺跡群と石江遺跡群は、二〇〇三年に調査が開始され、本調査は終了したものの、すべての報告書が出そろったわけではない。こうした状況下での考察には、常に不完全さがつきまとう。しかし、考古学や文献史学の研究者が、不完全ながらも眼前の情報に基づいて、可能性を議論していくことは、仮説の提示と検証という意味でもきわめて重要なプロセスだと感じる。その意味で、本書は現時点における城久遺跡群・石江遺跡群研究の到達点を示す。一方で、討論のまとめでも触れられていないように、まだまだ解決すべき問題は数多く、引き続き検討を行わなければならない。またいつの日か城久遺跡群と石江遺跡群の比較検討が行われることへの期待を述べて、本書の紹介を終えたい。私の能力的限界から一面的で甚だまとまりのない紹介になつてしまったことをご海

容願いたいと思う。
(二〇一〇年五月刊 A5判 四一六頁 定価七二〇〇円+税
森話社)

書評と紹介